

研究課題

日常の授業における基礎的な学力向上のためのICT活用指導法の開発

副題

学校名	富山市立山室中部小学校
所在地	〒939-8022 富山県富山市山室荒屋162-2
学級数	27
児童・生徒数	813名
職員数/会員数	51名
学校長	野間 広重
研究代表者	野間 広重
ホームページ アドレス	http://www.tym.ed.jp/sc112/



1. はじめに

教師は、45 分間の授業の中で、子どもが確かな学力を習得できるよう実践を重ねている。ところが近年では、立ち歩きなどにより授業が成立しない教室が話題になっている。子どもが落ち着いて学習に取り組むためには、基礎・基本となる内容を学ぶ前提として、すらすらと音読する、かけ算九九を暗唱するなどの基礎的な学力を身に付けていることが望ましい。さらに、その前提として、机上の整理を行う、姿勢良く学習するなどの学校での生活規律が確立していれば、子どもは学習に抵抗感をもつことなく取り組み、学級全体に落ち着いて学習に取り組む雰囲気生まれるだろう。

しかし、教師が黒板にチョークで書き、子どもが教科書を参照する従来の指導法だけでは、学習に取り組めない子どもが存在する。そのため学力が身に付かず、さらに学習に集中できないという悪循環に陥ってしまう。全校児童 813 名の本校でも同様な問題を抱えた子どもが存在し、近年の重要な課題となっている。

子どもたちの多くは、毎日たくさんの映像情報の中で暮らしている。そのような子どもたちに対して、資料、教材や望ましい生活規律をビジュアルに提示できたなら、子どもの意欲を喚起し、よりよく理解することだろう。効果的な ICT の活用は、子どもの学習を支援し学力を支える強力なツールとなると考える。

本研究では、日常の授業の中で ICT を効果的に活用することによって子どもが落ち着いて学習できるようにし、基礎的な学力を習得させる指導法を示す。

2. 研究の目的

本研究は、日常の授業の中での ICT を効果的に活用した指導法を明らかにすることを目的とする。本校では学力の構造を図 1 のように考えている。これに基づき、本研究では、以下の 3 つの領域の指導法を開発する。

(1) 学校における生活規律確立のためのICT活用による指導法の開発

ICT を活用したビジュアルな生活指導によって学校での生活規律である生活習慣や学習習慣を確立し、全ての児童が落ち着いて学習に取り組めるようにする。

(2) 基礎的な学力を習得するためのICT活用による指導法の開発

基礎・基本の学力の前提となる基礎的な学力を習得するためのモジュール学習を、ICT を活用しながら毎日継続することによって、全ての子どもの基礎的な学力の底上げを図る。

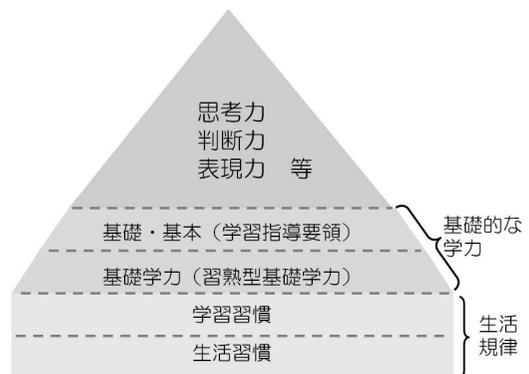


図 1 本校が考える学力の構造

(3) 基礎・基本の学力向上のためのICT活用による指導法の開発

発問・指示・説明の明確化やねらいに応じた教材の焦点化、ノートの指導など、ICT 活用による指導方法の改善を行うことによって、教師の授業力を向上させ、子どもに確実に基礎・基本の学力を身に付けさせる。

3. 研究の方法及び内容

3つの領域の指導法を開発するために、「生活規律確立部会」「基礎学力定着部会」「授業力向上部会」の3部会を設け、授業研究を通して各部会で研究を進める。(図2)

(1) 生活規律確立部会

生活規律上の問題点を洗い出し、育てたい子どもの姿を明確にして、生活習慣・学習習慣確立のための指導の工夫・改善を行う。ICT を効果的に活用して子どもの視覚に訴え、比較したり動作化したりすることで指導の効果を促すなど、「視覚化」「具体化」「簡素化」をキーワードとした指導法を工夫する。

(2) 基礎学力定着部会

模擬授業を中心とした授業研究を通して、モジュール学習の指導内容及び ICT を活用した指導法を検討し、15 分間の指導法パターンを整理して明らかにする。また、一定期間の中で、子どもの変容をとらえ、指導法の有効性を見極め、改善につなげる。

(3) 授業力向上部会

研究授業や模擬授業を通して、日常の授業での効果的・効率的な指導パターンを整理する。明らかになった指導法を日常の授業を通して検討し、改善する。

また、3部会を母体として研修を進めるが、必要に応じて学年・学級が協力し、指導法について共通理解して改善を進める。

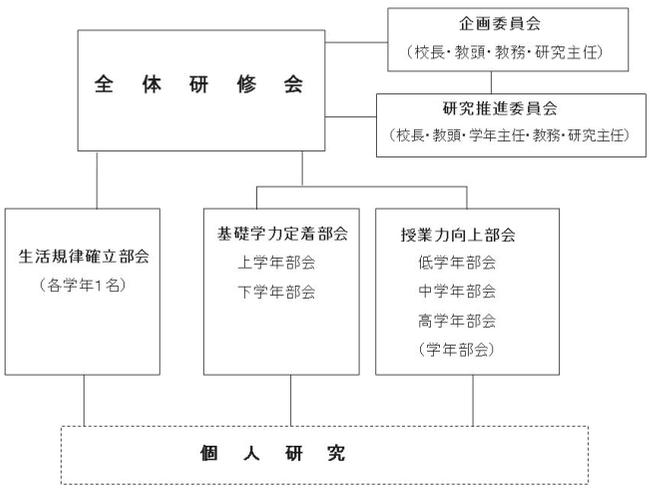


図2 研究組織図

4. 研究の経過

【3部会の実践】

(1) 生活規律確立部会の取り組み

従来は、清掃や給食の進め方などは、担任の裁量で決めることが多かった。しかし、それでは、担任が替わる度に指導内容が変わるため、年度初めの子どもたちは、とまどうことが多かった。そこで、生活規律確立部会では、学校における生活習慣や学習習慣の問題点を洗い出し、身に付けさせたい生活規律を以下の5つの指導場面で整理し、それを基に生活習慣、学習習慣のスタンダードを作成した。

- ・ 給食の後片付け
- ・ 清掃の仕方
- ・ 机の中の整理整頓
- ・ 正しい姿勢
- ・ 鉛筆の持ち方

全校で一貫した指導を行うことによって、学年・学級が替わっても、子どもたちがとまどうことなく活動に取り組めるようにした。例えば、清掃活動では、特に気を付ける事柄を重点事項として位置付け、「一方通行で雑巾がけをする」など、全校が同じルールで活動できるようにした。(図3)

教師は、どの子どもに対しても、同じように指導することが可能になるので、指導にぶれがなくなった。学校全体が落ち着き、子どもたちに学習に進んで取り組もうとする構えが生まれた。

また、生活規律の効果的な指導のための3つのレベルを想

清掃時間の流れ[教室]<例> ◎指導のポイント

時刻	子供たちの動き
移動	チャイムが鳴る前に、教室の机いすを下げておく 【チャイム】 ◎ チャイムが鳴ったら、すぐに遊びをやめ、掃除場所へ移動する
清掃	三角巾をつけ、掃除場所に集合する (可能なところは、教室に集合する)
	① 全員そろったら、始めのあいさつをしてから掃除を始める そろっていないときは、1:25まで待つ
	窓を開ける ほうきで、教室の前の部分を掃く
	◎ 雑巾で、教室の前の部分を拭く <全員> ・一斉に拭き始める ・落ち着いて拭く
掃除	机いすを前に運ぶ <全員> ほうきで、教室の後ろの部分を掃く
	◎ 雑巾で、教室の後ろの部分を拭く <全員> 机いすを元に戻す <全員>
	② ほうきでごみを集める 黒板をきれいにする 机や棚を拭く 机の脚や床のごみを拾う 他の掃除場所から戻ったら手伝つ
	清掃用具を片付ける
点検	1:35 掃除場所の点検をする やり残したところがないか確認する 終わりのあいさつをしてから、掃除を終わる 手洗いをする

図3 生活習慣のスタンダード例

定した。そして、それぞれの指導を行う際には、いくつかのステップに分けて指導すると効果的であることも分かってきた。例えば、「正しい姿勢」の指導では、レベル1：話を聞く姿勢、レベル2：教科書を持って音読をする姿勢、レベル3：鉛筆を持って字を書くときの姿勢の3つのレベルを考えた。レベル2：音読をするときの姿勢の具体的な指導場面では、ステップ1で悪い姿勢とよい姿勢を比較してポイントを確かめさせる。ステップ2でポイントを言葉で覚えさせ、実際にやってみることで意識させる。ステップ3で、その場で撮影した子どもの姿を見せて今後の意欲をもたせる、という3つのステップで指導を行った。(図4)

このように、5つの指導場面で、それぞれのレベルやステップでの実践を重ね、指導法を検討し、工夫・改善を図ってきた。



図4 音読をするときの姿勢指導

(2) 基礎学力定着部会の取り組み

基礎的な学力を習熟させる時間を確保するために、毎朝15分間の「基礎学力の時間」を校時表に位置付けた。「基礎学力の時間」では、確実に習熟させたい内容として、主に、漢字、計算、音読を取り出して指導してきた。様々なパターンで飽きさせず、楽しく、繰り返し学習できるように、多様な指導のパリエーション、目的に応じた自作のワークシート、評価の仕方を工夫した。

例えば、新出漢字の指導場面では、大きく映した文字を見せて、漢字の読み方や成り立ち、使い方などを学習し、何度も空書きさせて確実に筆順を覚えさせた。何度も同じ文字を書くことが、確実な習得につながった。(図5・図6)

教科に関連する知識を習熟させる指導場面では、フラッシュ型教材やワークシートを開発し、活用してきた。子どもの「できる、わかる」を重視し、全ての子どもができる簡単な内容を定着するまで繰り返し反復学習し、習熟させてきた。

また、15分間を2つまたは3つに分け、指導のパリエーションやワークシートを組み合わせる指導を行った。始めに、古典や短い詩などをリズムよく音読させ、次に、フラッシュ型教材を見せてテンポよく既習漢字を読ませる。こうして、子どもたちの集中力を高め、最後に新出漢字の学習をする。子どもたちの表情がよくなり、意欲的に学習できるようにな

った。

このように、基礎学力の確実な定着を目指して指導法を開発してきた。



図5 新出漢字の学習 1



図6 新出漢字の学習 2

(3) 授業力向上部会の取り組み

教師の授業力向上をめざし、ICTを効果的に活用した「わかる授業」のための指導法の開発に取り組んできた。教科の基礎・基本を確実に習得させるため、日常の授業の工夫・改善を核として研究を進めてきた。

どの場面で何をどのように提示するのか、その際にどんな発問や指示、説明を行うかを考えた。次に、子どもの理解に合わせた授業のスマールステップと、その際のICT活用法を検討した。教科書を読み解くことによって、ねらいを明確にし、スマールステップをより意識するようになった。授業研究の過程で、以下の3つのICTを活用した指導のパターンが見えてきた。

- ・知識の定着
- ・技能や操作の仕方の習得
- ・思考の整理

指導パターンを授業に取り入れることで、基礎・基本を習得するための効率的な指導が可能になり、習得された力を活用して思考力・判断力・表現力を育てる授業に、十分に時間をかけることができるようになった。

例えば、「技能や操作の仕方の習得」の指導では、平行四辺形のかき方を指導するために、教師が手本を拡大提示しながら、子どもにかき方のイメージをもたせる。子どもに教師の手本を見せ、実態を把握しながら、一緒にかかせ、確実にかけるようにする。一人でかかせる、という3つのステップで指導を行った。この指導法では、個別指導の必要な子どもの数がぐんと減り、その分、じっくり考えさせたい場面での時間が生まれた。

このように、基礎・基本を確実に習得させる「わかる授業」の指導法を開発し、教師の授業力向上を目指してきた。

【校内研修の工夫】

ICT を活用する研修を初めて実施したのは平成 18 年度であった。機器操作研修から始まった本校の研修だが、次第に ICT 活用場面を検討する授業づくりの研修が中心となっていた。研究授業に先立ち、模擬授業を繰り返し実施した上で実践を進めた。これらの研修を通して、部会や学年の教師の創意工夫が反映され、教師の授業づくりへの意欲が高まっていった。(図 7)

全体研修では、グループ協議やワークショップを取り入れて、工夫点や改善点を明確にしてきた。個々の教師が、「わかる授業」を意識することで、全体研修の場が活発になった。

このように、模擬授業を中核とした授業研究を実施しながら、日常的に行う授業の指導法について検討した。

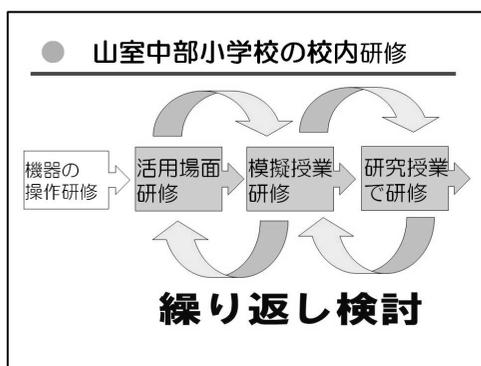


図 7 校内研修のサイクル

5. 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

・生活規律の指導が必要な場面を整理し、「給食の後片付け」「清掃の仕方」「机の中の整理整頓」「正しい姿勢」「鉛筆の持ち方」の 5 つの指導場面で、それぞれのレベルやステップに応じた指導法を開発した。全校で一貫した指導を行うことによって、どの子どもに対しても同じように指導することが可能になり、学校全体が落ち着き、学習に進んで取り組む

うとする構えが生まれた。

・毎朝 15 分間の「基礎学力の時間」で確実に習熟させた内容を取り出し、多様な指導のバリエーション、目的に応じた自作のワークシート、評価の仕方を工夫して指導法を開発した。全ての子どもができる簡単な内容を定着するまで繰り返し反復学習し、習熟させて指導することで、基礎学力の向上が見られた。

・子どもの理解に合わせた授業のスマールステップと、その際の ICT 活用法を検討し、「わかる授業」のための指導法を開発した。ICT を活用した 3 つの指導のパターンを授業に取り入れることで、基礎・基本を習得するための効率的な指導が可能になった。

これらの指導法があるため、年度が替わっても、教職員の異動があっても、継続して指導していくことが可能になった。

(2) 課題

ICT 活用による指導法があることで、年度が替わっても継続して指導していくことができる一方で、指導法を裏付ける理論的な理解が不十分になってしまった場合には、指導が形骸化してしまう傾向が見られた。年度当初の研修内容や研修方法を工夫し、開発した指導法を継続していく努力が必要である。

6. おわりに

本研究で明らかにした指導法が、学習に主体的に取り組むことができない子どもや学力がなかなか定着しない子どもの実態に悩む全国の多くの学校にとって、少しでも役立つ知見となれば幸いである。

参考文献

「すべての子どもがわかる授業づくり ―教室でICTを使う―」
 高橋 純・堀田 龍也 編著 高陵社書店
 「活用力を育てる授業の考え方と実践」
 安彦 忠彦 編 図書文化社
 「小学校 学習指導要領」文部科学省